

オーストラリアバオバブ生育記録 ～導入から7年目の開花記録～

西内良

2017年10月3日の定植から7年が過ぎたオーストラリアバオバブ（以下バオバブ）の7年目の生育状況と管理について記録する。

落葉から萌芽

これまでのシーズンと同時期にあたる2024年1月中旬にすべての葉が落葉した。萌芽については5月30日、ごく僅かに目視で確認できた。これは当園大温室に定植以降、最も遅い萌芽である。

灌水と葉の生育経過

萌芽を確認したことから、6月3日に今シーズン最初の灌水を行った（灌水量100L）。その後梅雨入りが発表されないものの晴天の日が少なく、また、バオバブ植栽区が他の植物の影となっている影響もあるのか、土壌が一向に乾かず、6月はもう一度100Lの灌水を行うのみであった。6月末時点での葉の量および葉長について、定量的データはないものの、例年に比べて少なく、葉色が薄いという印象であった。以降、10月下旬に葉の黄変が始まるまで、葉の量及び葉長、そして葉色が平年並みになった印象を感じることはなかった。

7月には梅雨入りしたこともあり、引き続き土壌が乾かない状態が続いた。月内の灌水は7月4日および25日の2度のみ、ともに灌水量は200Lであった（月内の総灌水量は昨年と同等）。

8月および9月の灌水について、土壌の表層から概ね7cmの深さの砂に水分が感じられなくなってから灌水し、一回当たりの灌水量は350Lとした。月当たりでみると灌水頻度が昨年の月8回に対し今年は5回であり、総灌水量は同等である。また、8月上旬から9月上旬において、業務委託による薬剤散布後、新芽への葉害が2度発生した。原因は昼間の高気温時に薬剤散布を行ったためと考えられた。特に、9月上旬のサンヨール乳剤（500倍希釈）散布後は他の植物の葉にも多くの葉害が発生したため、

9月中旬以降、薬剤散布の時間帯を気温の低下する16時30分以降とした。

10月は最高気温は30℃前後と平年より高い日が続いたものの、夜温の低下および植栽土壌への日照量の低下に伴い、土壌が乾燥しづらくなり、2週間に1度、300Lの灌水へと変更した。10月26日に葉の黄変が確認され、その後は11月20日に表土に軽く灌水して今年の灌水を終了した。

出蕾と蕾の生育経過

今年最初の出蕾確認日は8月3日であった。個数は3個で蕾の長さはいずれも約1cmであった。8月8日には更に3つの蕾を確認した。しかしながら、いずれの蕾も成長の様子が確認できず、8月26日に蕾を触診したところ、水分を感じない程固く乾燥しており、少し力を入れると枝先から落ちた。以降、新たな出蕾は確認できず、最終的に今年確認できた蕾の数は6個であった。そして、これらすべての蕾が1cm程度の長さからは成長せず、開花に至らなかった。なお、新芽同様、葉害による影響も否定できない。出蕾を確認しながら、一輪も開花に至らなかったのは2019年に初開花して以降では初である。なお、2019年以降、いずれのシーズンにおいても蕾の生育が途中で止まり開花に至らなかった例を確認している。

秋以降の状況

11月上旬、一般財団法人進化生物学研究所理事長兼所長の湯浅浩史先生に写真を送付し、診断を依頼した。その結果、不足している養分がある可能性があり、リンとカリウムの施肥を検討してはと指摘をいただいた。また、過去に一度腐食したために当園で裁断したところのある太枝（直径約15cm）の断面が枯れて黒変し、一部の表皮が割れて剥がれていたために、当該の枝の内部で腐敗が進んでいないか調べることを勧められた（写真1）。そのため、11月27日、当該の枝をチェーンソーを用いて少しずつ裁断し、断面を観察した。断面に最も近い枝まで切り戻したところ、枯れた黒変部分が続いていた（写真2）。引き続き段階的に切り進めたところ、断面の枯れた部分は減少していった（写真3）。最終的に当初から約50cm裁断したところで枯

れた部分が無くなり、危惧していた内部腐敗も見られなかった（写真4）。その後、切り口には殺菌剤のトップジン M 水和剤の1000倍希釈液を散布し、翌日切り口にトップジン M ペーストを塗布した。

12月に入り、葉の黄変と落葉は加速している。なお、本稿執筆時の12月19日現在、落葉は完了していない。

今後の課題

先述のとおり、当園定植後に初開花して以降、初の不開花シーズンとなった。開花数は2021年をピークに減少を続けている。葉の量や葉長、葉色も過去より劣り、また、最大幹周（地上220cm付近）は導入時より増えているものの、胸高直径は逆に導入以来毎年少しずつ減少している。生育不良の原因として考えられることをこれまでの記録や今年の観察結果から推察すると、（1）落葉時期に変化は無いが萌芽開始時期が遅れているため、生育期が短くなっている、（2）大温室内にバオブブよりも樹高の高い樹木が多数植栽されており、かつ、現在もその樹高の伸長がバオブブのそれよりも早く進んでいるため日照が遮られ、光合成量が年々減少している、の2点が考えられた。

（1）については、冬の低温期が自生地のカナナラより長く、かつ気温も低いことが要因かもしれない。現在大温室のバオブブ植栽区付近の温度は11月下旬から3月上旬までの3か月半、概ね20℃～13℃弱となっている。一方、自生地カナナラは極寒期でも30℃～16℃で、その期間も1ヶ月ほどである。なお他展示の都合上、早くとも2月末までは現在の温度設定の変更は難しい（むしろ春の特別ラン展前後ではランの花もちを優先するため、最低設定温度をさらに2℃下げている）が、3月から大温室の最低温度設定を上げるか、ヒーターマットを使用してバオブブ植栽区の地温を上げることで、萌芽が早まる可能性がある。

（2）について、バオブブより樹高の高い2株のトックリキワタとプセウドボンバックスがバオブブの西南側に植栽されており、これらに大きく日照が遮られていると考えられる。当園のバオブブは自生地では日照を遮る物体が無い環境で生育していた。しかし、現在の大温室にお

いてバオブブはヤシ類や温室の鉄骨等にも遮光され、生育期に株全体に直射日光が当たる時間は4～5時間程度である。毎年冬にトックリキワタとプセウドボンバックスら3株を強剪定しているが、1年で樹高は剪定前以上に成長しているため、バオブブに対する遮光は年々強まっている。そのためこれらに対してさらなる強剪定や年に複数回の剪定、あるいは撤去が必要であると考ええる。

謝辞

一般財団法人進化生物学研究所理事長兼所長の湯浅浩史先生には親身な御返答を頂きました。心より感謝の意を表します。

参考

Climate and Average Weather Year Round in Kununurra

<https://ja.weatherspark.com/y/142542/%E3%82%AB%E3%83%8A%E3%83%8A%E3%83%A9%E3%80%81%E3%82%AA%E3%83%BC%E3%82%B9%E3%83%88%E3%83%A9%E3%83%AA%E3%82%A2%E3%81%AB%E3%81%8A%E3%81%91%E3%82%8B%E5%B9%B4%E9%96%93%E3%81%AE%E5%B9%B3%E5%9D%87%E7%9A%84%E3%81%AA%E6%B0%97%E5%80%99>（2024年12月19日確認）



写真 1 剪定開始前の太枝黒変部



写真 3 黒変部減少



写真 2 当初断面直近の枝付近まで切断した様子



写真 4 黒変部の終了